
ふたりで

深月姫季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりで

【Nコード】

N0353E

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

ある日の小五郎と英理のお話。素直になれない二人だけど、たまにはこんな会話もあったりして…

頼杖をつきながらアスファルトの道路を見下ろした。視界に入るのは駅に向かう人の波。何とかという若者向けのシヨッピングセンターがオープンしたと娘から聞いたのは、昨夜だったか。明日子供達を連れて遊びに行くの、と満面の笑みをたたえながら続けた娘をやり過ぎし、ビールのかわりをねだった自分に、今やなんとも言えず呆れ返っていた。

「何であいつがここに」

人の波、その流れに逆らって立ち止まり、男の視界に飛び込んで来た女のシルエツト。それはまさしく会いたくない人のもので…一段一段ヒールが階段を撫でる澄んだ音に、男は冷や汗を流しながら机の下に隠れた。

「蘭おは… あら、誰もいないのね、上かしら」

息を殺しながら心の中で早く帰れと念じる。だがその願いも空しく、次の瞬間冷たい声が響いた。

「いい年齢シツして隠れんぼ？ 暇なのね、眠りの探偵さん」

頭上から降り注いだ皮肉な笑みに、恐る恐る顔を上げて、飛び上がる。

「英理… お前がなんでここに」

作り笑いを浮かべ、埃だらけの両膝をはたきながら立ち上がる。

「蘭に呼ばれたのよ、たまには一緒にご飯でも食べようって」

久々に頬に手を当てる仕草に小五郎はドキツとした。仲睦まじく暮らしていた昔の記憶が鮮明によみがえってきたのを、一呼吸おいて気を落ち着かせる。

「蘭ならコナンたちと買い物に行っていていねエよ」

「謀ったわね…」

眉をヒクつかせながらため息を吐いた英理に小五郎のため息が重なる。その時、奇妙なタイミングで時計が正午を知らせ、二人は顔を見合わせ思わず吹き出した。

「ねえ、久々にここの台所に立ってみようかしら」

頬を赤らめ、英理が顔を伏せると小五郎は慌てて手を振った。この別居中の妻のかなり独特なセンスは知り尽くしている。英理は顔を引きつらせている小五郎を軽くにらんだ。

「あら、その顔は何かしら？」

「い、いや、たまには二人で外食でもどうだ」

照れ隠しのように咳払いをする小五郎の、予想外の言葉に英理は何度か瞬きした。

「あなたがそんな科白を言うなんて、珍しいわね」

皮肉か、と、また喧嘩腰に口を開きかけて、英理の顔を見るとその顔は朱に染まっている。英理は穏やかに続けた。

「ええ、行きましょう。今日は何にも予定がないの」

「あ、ああ……」

二人は顔を見合わせて恥ずかしそうに小さく笑うと、並んで歩き出した。二人の間の距離はもどかしいけれど、お互いの存在を確かめ合うように、ゆっくりと……

別居夫婦、こんな結びつきもいいかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0353e/>

ふたりで

2010年10月21日23時48分発行